

式 辞

台風の接近が心配されましたが、本日ここに第六六回附属高校開校記念祭が開催されますことを皆さんと共に歡びたいと思います。本日は、生徒・教職員・保護者・同窓生の皆さんが本校の来し方を振り返り、現在も脈々と受け継がれている本校の伝統を確認するとともに、将来に対して力強い誓いを立てる日です。

本校は戦後間もない昭和二十二年四月に開校しました。その源流は、終戦間際昭和十九年、わが国で三番目に設立された高等師範学校、すなわち東京、広島につぐ金沢高等師範学校の附属を母体とし、わが国や世界をリードする若者を育成する機関としてスタートいたしました。金沢高等師範学校は、第二次世界大戦下、理系分野の英才を育成する「特別科学教育研究班」を組織し、「特別科学学級」を設け、全国に先駆けて英才教育をスタートいたしました。「特別科学学級」には、北陸三県のみならず全国から生徒が集いました。一時期は戦禍を逃れ東京から疎開した英才たちも金沢に集い、まさに国運をかけて学んだのです。しかし、敗戦により、本校の卒業生は、様々な分野の専門家として各自の才能を、戦争ではなく、わが国の復興や世界の発展のために発揮されました。

本校開校当時の金沢高等師範学校長は塩野直道先生です。塩野先生は昭和一〇年代、文部省の数学教育の責任者として、いわゆる「緑表紙」と呼ばれる教科書を編纂され、その任を終え、金沢高等師範の立ち上げのために大抜擢されました。緑表紙教科書は、世界の理数科教育を変えた教科書として今日でも高く評価されています。

塩野校長より本校の初代校長に任命された小池善雄主事は、『附校十年』記念誌で「創設当時の思いで」と題し、約四か月間で、校舎・教官・学級編成・生徒募集の準備にあたられた際のご苦勞を次のように語っておられます。「敗戦によって古きものは根底からくつがえされ、新しいものが生まれ出ようとしているときである。教育も新しい制度のもとに、新しい目標を掲げて再出発しようとしている。新日本にふさわしい、理想的な学校をつくるには絶好の機会である。惰性もなければ、因習もない。何一つ従来のゆきがかりのない学園創造である。」「最初から大規模なものは望めないとしても、教室はもちろん、図書室も、実験室も、音楽室も、体育館もすべて理想的に完備したものとし、生徒はそれぞれの天分に応じて自由にこれら

の施設を利用して自らを磨いてゆく。しかも各教科にはそれぞれすばらしく優秀な教官がいてこれを指導する。」と、明るい、自由な、しかも学究的な学園を構想されたのですが、当時の文部省から与えられた経費は、現在でも向いの自衛隊に残る兵舎の倉庫を教室らしきものに改造し、必要な机と椅子を揃えるだけでほとんどいっぱいであつたと、述懐しておられます。

実験設備一つない兵舎に特別科学学級の生徒と新入生八十名を加えた約一四〇名の生徒と、新任教官わずか四、五名のまことに小さい学校の出発でした。「しかしたとえそれは小さくとも、我々はあくまでも、北陸の地における新教育の一つの導きの星たらんことを期し、やがて新日本の空に大きく羽ばたく鳳雛の揺籃たるべきことを信じて疑わなかった。生徒にも、この誇りと気概をもつことを望んだ。」「何はなくともこんなに恵まれた学校はちよっと類がないとひそかに誇りを感じた」と小池主事は述べています。

本校は現在でも規模が小さく、施設面でも恵まれているとは言えませんが、学都金沢で、日本海側唯一の国立大学法人附属高等学校として、多様化・複雑化する現代社会の様々な分野でリーダーとして活躍する卓越した人々を世に送り出しております。皆さんは、草創期の精神を受け継ぎ、高い志と誇りをもって、思う存分青春を謳歌するとともに、わが国の大震災からの復興やグローバルな経済・社会・環境・資源等の危機的課題の克服に創造的に寄与する有為な人となれるよう、弛まず研鑽を積んでほしいと願います。また、野田の豊かな自然に囲まれた落ち着いた環境の中で、附属をこよなく愛する先生方とともに、日々の授業・生徒会活動・課外活動を通して充実した毎日を送ってほしいと願います。

本日から開催される本校最大の伝統行事である開校記念祭にあたり、草創期の教官や生徒たちの付属への深い想いに浸り、先輩方の輝かしい栄光を誇りとし、自主自律の校風を、時代を超えて受け継いでゆくことを確認したいと思えます。この二日間が充実したものとなりますよう、生徒諸君の絆がさらに強まりますよう、そして、保護者や地域の皆様との親睦が一層深まりますように願ひ、開校式典の式辞といたします。

平成二十五年十月二十六日

金沢大学附属高等学校長

大谷 実